もって、鈴木商店の抱える多額の借入金は速やかに返済へ向かう筈であった。

鈴木商店の破綻

金子直吉は単なる商社の経営のみならず新しい産業の育成と言う側面でも鋭い事業感覚を備え持っていて、双方の有機的結合によって企業規模を拡大するばかりでなく、国民経済や国際経済にも寄与すべく高次元の立場で事業を構想できる数少ない人物と言えよう。

そういう意味では第二次世界大戦後一般用語となった「総合商社」を三十～四十年前の大正時代に、企業の機能的側面ばかりでなく社会的役割にまでレベルアップして構想した人だが、彼の構想力を現実に生かす前に、会社を取り巻く内外の客観情勢が彼の構想を阻んで窮地に追い込まれることになる。

それは第一次世界大戦終結後長期に亘って暫次その度合いを増していた資金難が限界に達し、その資金を依存して来た台湾銀行との共倒れの危機に直面して、台湾銀行が国の支援を受ける条件として「鈴木商店との絶縁」を強行せざるを得なくなり、金融支援打ち切りを通告されたことによって決定的となった。ここにおいて鈴木商店は不渡り手形を出して倒産の止むなきに至った。時に昭和二年四月四日。

鈴木商店の事業破綻については、第一次世界大戦終結による事業環境の変化、国際的軍縮による思惑の外れ、関東大震災による日本経済の混乱等客観的条件に起因する面が大きいことはいうまでもないが、金子直吉個人の性格的欠陥による面も多分にあることが指摘されている。

それは銀行に事業内容や資金の使途を詮索されるのを嫌った金子直吉は、商取引上の資金需要と新事業展開のための固定的資金需要とを区別せず総ての借入金を短期の資金として調達したため、無用に高い金利の支払いを強いられ、自らを窮地に追い込んだというのである。

この様に見て来ると帝人という子会社を介しての人絹糸の開発は、製造技術の確立においても、又設備投資や操業赤字の資金調達においても金子直吉という強力な個性によって護られて来たことになる。

帝人が漸く金子直吉の目的に適うようになった矢先に親会社の鈴木商店が、台湾銀行から絶縁状を突きつけられ倒産したため、彼の戦略は達成を目前にして頓挫し日の目を見ることなく葬り去られた。

帝人の生み出す大きな利益によって鈴木商店の抱える膨大な借金を返済してゆくという戦略は、その中核たる帝人岩国工場が突貫工事で完成をみていた丈に金子の無念は一入だったに違いない。

帝人の事実上の独立

鈴木商店の人造絹糸製造部門に過ぎなかった帝人は、昭和二年四月四日を境に裸のまま冷たい社会の風に晒されることになった。

しかし広島工場の製品が市場の評価を得ていたことと、岩国工場の完成で将来展望が開けていたので、一時的な混乱（一般社員による製品の売り歩きや現金持参の企業家による直接取引等）はあったが、整理案と再建計画が認められると暫次事業は安定に向かった。

それにこれらの折衝の当事者となった台湾銀行が、人絹事業の将来性と当時の市場性とを正しく認識していて、帝人幹部の策定した対策案に好意的に対処してくれたのが、鈴木破綻直後の独立運営にプラスに働いた。台湾銀行の理解は爾後の運営においても速やかに独立体制への移行を促した反面、引き受けてくれた帝人株式の不安定性という

問題を抱えた。そこで本社を大阪の江商ビルに移して大阪資本との提携強化に務めた。

鈴木商店の破綻によって帝人は総ての面において自分の足で立つことを余儀無くされたが、その時に岩国工場という鈴木商店にとってのドル箱が完成していたことは不幸中の幸だった。しかし予算の一・五倍にまで膨らんだ岩国工場の突貫工事費は、鈴木商店の倒産を幾許か早めたことは否めず、手放しで喜べないものがある。

果たせぬ夢

前途のように金子直吉は、商社の経営と諸々の新事業の育成とを有機的に結合して一大コンツェルンに育て上げることに夢を託して果たさなかったが、金子直吉の遺伝子を帝人に引き継いだ唯一の経営者を挙げるとすれば大屋晋三だろう。

彼は政界から帝人へ復帰直後にポリエステル繊維（テトロン事業）の技術を導入して成功させた余勢を駆って、石油開発事業を中核にした総合化学会社を夢見て果敢に挑んだが、石油の試掘に恵まれず、時代の流れが「重厚長大」から「軽薄短小」へと大転換したことと相俟って実現の夢を果たせぬまま他界した。

帝人の底流に鈴木商店の遺伝子が脈々として流れているとすれば、何時の日にか「とてつもない大きな夢」を掲げて社員を引き回すリーダーが現れるのを期待するのは私だけではないだろう。

「神戸の思い出

今村三郎

戦後六十年の今年は平成十七年、昭和の年号に換算しますと昭和八十年（西暦二〇〇五年）、私は昭和三年で辰巳会の辰の字と同じ辰年生まれなので、この九月で早いもので満七十七歳、因みに日商も同じ年に創立されました。

昨今、物忘れが酷くお医者様に記憶力減退と申告するのを忘れたりして、とにかく今の内に幼年、少年、青年時代の印象深かった神戸で過ごした出来事を思い出して「神戸の思い出」と題して綴ってみました。何分、半世紀以上前の昔話のことで読みづらいところはお許し下さい。

神戸は、北側は緑の美しい再度、摩耶、六甲の山並みが聳え、南側には紺碧の茅渟（ちぬ）の海を控え、気候温暖、風光明媚なエキゾチックな街で天下の良港神戸港と共に、神戸っ子の誇りとするところであります。

私は、父（頼吉）が神戸に本店が在りました鈴木商店（大正九年入社、鉄材部に配属されました。部長南治之助様、次長楓英吉様、父の生前の話では、金子直吉翁が成功された日米船鉄交換契約について入社当時、楓英吉様より教示賜わったとのことであります。）に勤めていた関係上、住居が神戸に在り神戸で生れ育ちました。夏には兄達に連れられ白砂青松の須磨浦、塩屋、垂水、舞子の海岸でよく海水浴を楽しんだものであります。

昭和八年（西暦一九三三年）に神戸の山手・山本通に在った神戸女学院が、西宮の岡田山に移転、昭和九年（一九三四年）に新築落成披露後、母の同窓会があり、物心が着いた幼稚園児であった甘えん坊（七十過ぎのオジイちゃんでも、昔は甘えん坊の時代がありました）の私が母に連れられ、初めて阪急電車に乗り門戸厄神下車、岡田山に参り、青空に美しく映えた優美がベージュ色の建物と緑の芝生が印象的で、同窓会では、母の娘時代の恩師のデフォレスト院長先生が、腰を屈めて優しく微笑みながら握手をして下さったことを今でも覚えておりますが、その数年後、私の大好きであった帝国海軍の精鋭機動部隊が、母の恩師の母国・米国のハワイを攻撃しようとは。

昭和十一年（一九三六年）、小学二年生の頃、父に連れられ神戸の象徴の一つでもあった、ガントリクレーンのある川崎造船所に参り、巡洋艦「熊野」の進水式を見学しましたが、海軍軍楽隊演奏の荘重にして軽快な軍艦マーチのメロディーと共に、ガントリクレーンの船台を滑って行ったスマートな艦影は、嘗ての帝国海軍を象徴するものであり、少年であった私の脳裏に深く刻み込まれました。その時代は未だ平和だったので、記念品を戴きましたが、盾形の銀色の文鎮で表面には、軽快な艦影に巡洋艦熊野、進水記念、昭和十一年十月十五日。裏面には、株式会社川崎造船所艦船工場とあり、私の宝物として今でも大切にしております。この後この船台よりは、太平洋戦争中勇戦敢闘した栄光に輝く、空母「瑞鶴」等が生れて行くこととなります。

私達の年代の者は、どうしても太平洋戦争を避けて通ることは出来ません。

昭和十六年（一九四一年）十二月八日、太平洋戦争に突入、その四ヶ月後の昭和十七年（一九四二年）の四月八日、関西学院中学部（父も中学部出身で、父の話では、三、四年生の頃、不思議なご縁で鈴木の日沙商会の西川玉之助様が中学部長をしておられ、修身の副読本として〝Ethios for Young People〟をご教示賜わったとのことであります）入学式、登校の為、阪急甲東園下車、西進、S字状カーブの上り坂の桜の満開のトンネルを潜り抜け、パッと視界が開け前方に澄み渡りたる青空の下、緑濃き甲山をバックにベージュ色の瀟洒な時計台の図書館を望み、美しい平和な学園だナーとしみじみ思い出しました。神戸女学院百年史を繙きますと、「近江ミッションの指導者であって、建築に精神的要素を重視、常に美しい建築を夢に描き、その夢の実現によりその建築の中に住む人、働く人に幸福をもたらすのが建築家自身の幸福であり特権であると信じていた設計者ヴォーリズ博士が、関西学院と神戸学院を設計され竹中工務店によって施工された」とあり、成る程と感心した次第であります。

その十日後の四月十八日、帰宅後の午後、房総半島、東方洋上よりウィリアム・F・ハルゼイ海軍中将麾下のエンタープライズ、ホーネットの二空母より成る米機動部隊より発進せる、ジェームス・ドーリットル陸軍中佐指揮のノースアメリカンB25双発爆撃機ミッチェル隊による、ヒットエンドラン戦法の奇襲攻撃があり、神戸にも一機飛来、自宅の屋根より数百米先の低空を猛スピードで遁走する戦時塗装を施された真黒な機影を発見、アサッテの方向でグワングワンと炸裂する友軍の対空弾が、印象的で戦争の前途を暗示するようでありました。その丁度一年後の昭和十八年（一九四三年）の四月十八日、私が尊敬していました山本五十六聯合艦隊司令長官が、南太平洋ソロモン群島上空で一式陸攻搭乗中に、米国陸軍ロッキードP38ライトニング戦闘機隊の銃撃により壮烈な戦死を遂げられ、日本の国運も下り坂になって行くのであります。山本長官は「日米戦争は世界の一大凶事にして聖戦数年の後、更に強敵を新たに得ることは誠に国家の危機なり」として、強く日米戦争に反対しておられたのに、世の中は非情なものでありました。

昭和二十年（一九四五年）になるや、米国通の山本長官が生前ご指摘の通り、米国は膨大な工業生産力に物を言わせ、戦艦、空母、その他艦艇と航空機を大増産、大航空艦隊を編成して、南太平洋、中部太平洋、西太平洋と暴れ回り、三月にはカーチス・E・ルメー陸軍少将麾下ボーイングB29スーパーフォートレス超空の要塞戦略爆撃団の数百機がマリアナ基地群に展開し、沖縄上陸作戦支援の為、十日に東京、十二日に名古屋、十三日に大阪と矢継ぎ早に三百機単位で、焼夷弾による、夜間無差別爆撃を実施大損害を蒙りましたが、次は神戸だと私は覚悟をしていたところ、十六日夜半、中部軍より警戒警報が発令され、直ちに戦闘帽（学校の制帽）防空頭巾を着用、ゲートルを巻き、続いて初期消火活動に必要な準備をすると、空襲警報が発令される。これが巡洋艦熊野であれば「第一警戒配備となせ」続いて「総員配置につけ」「対空戦闘用意」そして三式弾等によって「撃ち方始め」となるのが、こちらは悲しいかな十六歳の中学生の武器なしの非戦闘員だ。残念ながら三年前、初空襲を体験した屋上に上がり対空監視をする。辺りは厳重な燈火管制で真暗闇だ。下の方で警防団員が「退避、退避」と町内を連呼する。間もなく近くの友軍の高射砲陣地より実弾による修正射撃をグワングワンと実施すると、思わず身が引き締る。すると南西方向の淡路島方面よりB29特有の低音の爆音が聞こえ始め、サーチライトが照射開始、同時に対空砲火が一斉に火を噴き始め、炸裂音が、百雷が一時に落ちたような轟音となり全天を覆う。B29の第一目標は単機で悠々と高度二千か、これはデッカイ、銀翼が左右にスンナリと延び米軍の星マークが鮮やかでエンジンが四発の将に超空の要塞である。航空標識のライトを点滅させながら油脂小型焼夷弾の集束弾を投下、中空でバラバラになり、火のスコール状の雨となり、ザーと滝のような音を立てながら高取山北方へ着弾、一瞬の内に赤く燃え盛り、山影がくっきりと浮かび上がり、これを目標に一機乃至三機編隊が、来るワ来るワ繰り返し来襲、将に敵機は頭上だ。味方の高射機関砲の曳光弾のスピードが遅くて、もどかしい。二十五機まで数えるも周辺の大火災による猛煙に遮られ監視不能、従手空拳とはこのことか、止む無くイヤなチャチな道端の防空壕で待機する。前線で飛行機を無くしたパイロットの気持ちがよく分かる。間もな数米先の我が家の方向でガンと、又、イヤな音がする。直に我が家へ飛び込むと和室の家財が入っている押入れが、襖が吹き飛ばされ写真のフラッシュのように白く発火、燃えているではないか、咄嗟に、これはタマラン一人では消火不可能だと判断、班長を呼びに飛び出すと同時に後方でドカンと爆発、防空頭巾で大助かり、班長、隣組の方達の応援を得て、バケツリレーの消火活動で制圧したので、次は町内のあち、こち、に落ちた油脂焼夷弾の油脂が家屋の壁等に、へばり付いたのを火叩きで消火に努めた結果、町内も無事制圧に成功、二時間程の消火活動の戦闘も終り空襲警報解除、我が家に落ちた焼夷弾は、当時言われていた油脂と異なり、エレクトロンとかで鉄をも溶かす一千度以上の高熱で燃え、着弾後、チョッとタイムを置き、消火活動従事者を引き付けて殺傷の目的で爆発するとのことで、結果的に私は相手の裏を掻きヒラリと体を躱して無事で、若し、あの時一人で突進してバケツで注水していたら、爆発により一撃の下で斃され十六才を以って一巻の終りで、

以後、猪突猛進は慎むべしと悟りを開くこととなりました。

夜明けに、母が避難先の須磨の海岸より無事帰宅。その朝は寒く、ガス、電気、水道、全部ストップでしたが、どうにか、水分ばかりの朝食が出来たところ、「今村さん、やられましたか」と損保マン（損害保険業務の人）が勝手口より飛び込んで来られ、早速見舞われ調査、戦争保険の請求手続きをして下さって、地獄で仏とはこのことか、一面焼野ヶ原と瓦礫の山の中、交通機関はストップで、どの様にして来られたのか、空襲警報は解除されたものの依然警戒警報は未だ発令中で、現に紀伊半島南方海上には有力な機動部隊が作戦行動中で、十九日にも艦戦機群が来襲した程物騒な時代の中、身の危険を顧みず仕事に徹する勇敢な損保マン（損害保険業務の人）であり、誠に見上げた将に鑑であり思わず頭が下がりました。

その後、空襲が激化、隣組の方のご好意で疎開先の兵庫県氷上郡の黒井町に疎開することになり、母が私の転校手続の為に柏原（かいばら）中学校を訪問、植木孝之助校長と面接した際に「今村君のお父さんのお勤め先はどちらですか」と尋ねられ、「大阪の日商株式会社に勤めております」と、ご返事をしたところ、「ホー、永井さんが社長をしておられる日商ですか」と、びっくりせられ、「永井さんとは本校で同窓ですヨ」と、なつかしげにおっしゃられ植木校長より暖かいご配慮を賜りました。初めての疎開先でのこの暖かい親近感の溢れるお言葉は、どれだけ有難かったことでありましょう。このことは偏に永井幸太郎大先輩のお陰であり、世間は広い様で狭いものであると、言われる諺の通りであり、今も六十年も以前のことを振り返り誠になつかしい限りで、私の人生の佳き思い出として、いつ迄も大切にしているものであります。

かくして八月十五日終戦、翌日朝礼の際、温厚な校長先生より「本日、朝早く本校の先輩の海軍軍令部次長大西瀧治郎海軍中将が自刃されました。……」との訓話があり誠に印象深いものがありました。当日は残暑が厳しく暑かったことを記憶しております。私が小学の低学年の頃より父が購読していた「海軍グラフ」、兄が購読していた「海と空」を愛読していたので、世界の主たる海軍国の主力艦、空母、巡洋艦の艦形、性能、要目等を覚えていた程の軍艦マニアでもありました。従いまして私が大好きであった帝国海軍がなくなったことを実感として身にしみて感じられ誠に残念でありました。

神戸の我が家は、疎開中も数次に亘る大空襲のさなか、紙一重で助かったこともあり、幸運にも終戦まで爆撃されず無事であり、内地部隊に兵役中の兄達も順次復員し、父も外地より引き揚げて来て、日商本社に復帰して、ここに全員集合、食糧難の折柄、貧しい夕餉でも無事一家団欒することが出来、国敗れて山河あり、国敗れて我が家あり、この時、私は心の中で我勝てりと叫びました。

その後間もなく、父がたまたま永井社長と日商より帰宅途中の御堂筋にて話題の中で、昭和二十年三月の神戸空襲の際、自宅に落下した焼夷弾を私が、決死の消火活動で消し止めた為に助かったことを申し上げたところ「ソリャー今村君、三郎君の功績は金鵄勲章モンだよ」と御褒めの言葉を戴いたことを父から聞きましたが、誠に光栄の極みであり、このお言葉で空襲時の労苦がいっぺんで消し去りました。

昭和二十年より丁度五十年後の平成七年（一九九五年）一月十七日、当時在京（辰巳会東京支部では大変お世話になりました。楽しかった思い出がいっぱいあります）中でしたが、朝の定番ＮＨＫのニュースを点けると、何と、我が神戸が又しても五十年前と同様、黒煙天に沖

しているではないか、一瞬、我が目を疑いました。平成の平和な時代に何事か、又、空襲かいな？　すると震度6とか7とかで、画面に、なつかしい甲東園で、山陽新幹線の高架橋が阪急今津線に落ち、阪神高速の神戸線が倒壊したりして、大地震なんか絶対起こるものかと自負していた、神戸っ子の私は吃驚仰天すると共に胸が痛みました。大地震の実績のある東京の方が寧ろ恐ろしかったのですが。

それから十年、神戸は又、美しく復興され更に来年二月には神戸空港が完成開港されるとのことであり、文字通り飛躍発展することでしょう。なつかしい神戸で、辰巳会の皆様方と紺碧の茅渟の海で獲れた新鮮な海の幸で、乾杯しながら昔話に花を咲かせたりさせて戴くことを、至福としていますので今後共宜しくお願い申し上げます。

なつかしき聖夜の神戸遥かなり　　三郎

於　近江舞子

（平成十七年記）